

オラフ・ステープルドン著『火炎人類-ある幻想』、 試訳と解題（1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜口, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7113

オラフ・ステープルドン 著

『火炎人類——ある幻想』、試訳と解題（1）

浜口 稔・訳

訳者序文

以下は、イギリスの哲学者・幻想作家オラフ・ステープルドン（一八八六―一九五〇年）の中編小説『The Flames: A Fantasy』の試訳である。ステープルドンといえば、H・G・ウェルズに並ぶSF黎明期の巨人としての評価があるが、じつは本人はそれに違和感を覚えていた。ウェルズほど旺盛な創作活動を繰り広げたとは言えないが、ウェルズに比べても遜色ない、いやそれ以上に旺盛な想像力を繰り広げたことはまちがいない。

『最後にして最初の人類』『オッドジョン』『スターメイカー』『シリウス』の四作で有名であるが、この作品は五番目の傑作と評されながら、なかなか話題にのぼってこない。一九四七年に、八四頁でいどの、表紙に炎の絵柄をあしらった小ぶりのハードカバーとして出版されている（Secker and Warburg, 1947）。一九九七年の *An Olaf Stapledon Reader* (edited by Robert Crossley, Syracuse University Press, 1997) にはフルテキストで収録されているが、ウェ

フ上の Free SF Reader (<http://free.sfblogspoc.com/2006/09/Flames-olaf-stapledon.html>) をはじめ、様々なサイトで容易に閲覧できるし、ダウンロードも可能である。

さて、この作品はステープルドンが生涯をかけて取り組んだ哲学的課題を集約したものといつて差し支えない。太陽から来た炎人と、靈感にすぐれた地球人との霊的な格闘を題材にした SF 仕立ての寓話でありながら、壮大な宇宙論的な議論はいうに及ばず、感覚と外界認識についての緻密な描写は哲学的にも比類ない。SF とも哲学ともつかない作品であるが、それは「入り組んだ層をなし、もっとも難解で、もっとも入念に書かれた作品」(R・クロスリー)としても興味深い。邦訳される可能性は低い。そこで、星と人類の未来を幻視し続けた異貌の哲学者の、この風変わりな作品を本紀要において紹介し、その醍醐味を後半の「解題」で論じてみたい。

* * *

前置き

あとで読んでいただくふしぎな文書の出所については、前置きでもって読者に説明する必要があるように思われる。これは出版をあてこんだ友人から託されたものである。著者はそれを書簡体にしてわたしに送ってきた。予言者カッサンドラを略した「カッサ」というあだ名を書き添えて。カッサとわたしは、一九一四年の大戦が勃発する前にオックスフォード大学の学部生として学窓をともにして以来、ほとんど会っていない。そんな時代にあっても、カッサは不吉な予言に耽溺していた。あだ名はそれにちなんだものである。最後に会ったのは一九四一年のロンドン大空襲のさなかであったが、そのときカッサは、ずっと以前に、文明が世界規模の火災に吞まれて終わると予言していたことを、わたし

に思い出させたのだ。カッスはロンドンの戦いは、長びく災禍の幕開けであると断言していたのだ。

カッスはいつも少し気がふれている風であった、といつても本人はきっと気にしないだろう。しかし予言をするふしきな特技はまちがいがなくあった。奇妙にも、自分の行動の源泉については理解できないことがあるように思われたが、人の心を透察する驚異的な才能にはめぐまれていた。そのおかげで、わたしたちの何人かが探めごとを解決するときの助けとなることができたのだし、わたしもあることで、カッスには心から感謝しなくてはならないのだ。カッスは、わたしがかかなり破滅的な情事へと突き進んでいることを知り、魔法を使って（ほかに適切な表現が見あたらない）その愚かさを悟らせてくれたのだ。そういうわけでわたしは、以下の所説を出版してほしいというカッスの願いを叶えてやらなくてはと、義務にかられているのだ。これがほんとうの話かどうかを請け合うことはできない。わたしがカッスの綺想をまったく信じない頑固な懐疑家であることは、カッス本人がよく承知している。そのせいでカッスは「トー」というあだ名を考えつき、オックスフォード大学時代の友人たちのほとんどが、わたしをその名で呼ぶことに決めたのだ。 「トー」とはもちろんトーマスの略であり、新訳聖書の「疑い深いトーマス」のことをいっている。

はっきりといえることがある。カッスは、自分にとっては真実であることでも、その主張のとおりかどうかを判断するための直接の経験をもたない他者にとっては、まったくの妄言となるであろうことを、十分なくらい超然とした正気でもって悟っている。それなのに、わたしが信じることを控えたのでは、疑いを抑えることにもなる。カッスの突飛な予言的中するのを、わたしは過去に幾度となく見聞きしてきたのだ。

以下に続く分厚い手紙の冒頭には、有名な精神病院の住所がしるされている。

「トー識」

手紙

親愛なるト！

ぼくの現在の住所は、きつときみに先入観を与えてしまいうね。でも、この手紙を読み終えるまでは判断を控えてもらいたい。この居心地のいい収監所にいると、ぼくたちのほとんどが自由であると思ひ込んでいるのが、はっきりわかる。ほとんどがそう勘違いしているのだ。しかし、みながみなそうではないのだから、お願いだから心をひらいて聞いてほしい。ぼく自身のことには心配していない。ここでは手厚く扱われているし、これまでのように超心理学の研究も続けていられるのだ。自分をモルモットにすることにも慣れたからね。ところで、偶然にも（まあ、あとで話すが、それは実際偶然などではまったくなかった）、ぼくは重大なことを知ってしまったのだ。桁外れの、まったく予測しえない災禍から人類を救いたいのなら、なんとかしてその事実を知らせなくてはならない。

だからぼくは、一刻も早くこの手紙を出版するよう、きみをせかすのだ。もちろん、フィクションとして受け容れられる出版社ぐらいしかないことは承知している。しかし、たとえフィクションとしてであっても効果はあると、ぼくは一縷の望みをつなぐのだ。単なるフィクションと、フィクションのふりをした純然たる真実とを識別できるだけの、申し分ない想像力と洞察力の持ち主たちを喚起できれば、それで十分だろう。ぼくの話はフィクションとしてであっても受け容れられる出版社があるかどうか、それだけが気がかりだ。ぼくは作家ではないし、慣れ親しんだ常識を超える問題よりは、愛やら犯罪やらを小器用に編んだ作り話のほうに関心が集まるだろうからね。文芸批評家にしても、少

数の聡明な例外者を除いて、新しい思想に注意を促すよりは、目効きとしての名声を保つことに心とらわれているように思われるのだ。

さあ、なんにしても、はじめるとしよう！ 覚えているだろうか。古い話になるが、ぼくは自分に尋常でない能力があるのではないかと感じ、そしてきみたちはみな、とりわけ、トーよ、きみは情熱的なまでの知的誠実さのあまり、ぼくを笑いのめしたよね。でも、きみはだれよりも疑ってばかりいたが、だれよりも理解し共感してくれてくれたのだ。きみの笑いだけは、どういうわけかぼくを疎外しなかった。みなのは笑いはそうだった。しかもきみは、もっとも頑迷で分別をなくしたときでも、懷疑主義者でありながら、どこからか正しさを「嗅ぎわけていた」。きみはほんとうに疑い深かったが、感情的には心をひらき興味をいだいていた。

最近ぼくはその尋常でない能力を著しく発達させ、それを科学的に研究している。きみに影響されてね。それについては喜んですべてを語るし、いつかきみに批評してもらいたい。しかしいまのぼくは、それよりもはるかに重大なことが気がかりなのだ。なににせよ、人類的な見地からきわめて重大なことなのだ。

* * *

ここに放り込まれる二ヶ月ほど前、ぼくは湖水地方へと休暇に出かけた。そのときぼくはドイツにおける諸情勢について書き切るといふ仕事をやり終えていたところであったし、なにかしらぼくの神経に障るもの——早晚、ぼくたち人類全体に及んでくる物理的な悲惨だけでない、戦慄すべき精神的響きのようなもの——を感じていたのだ。イギリスに帰国したときには神経衰弱になりかかっていたので、そのときの休暇がなんとしても必要だった。そこで、ぼくはくつ

ろいでひとりになれる農家を見つけた。たつぷりと山野を歩くつもりでいたし、日暮れ時には超心理学関係の本を何冊も読み切るつもりでいた。

到着すると、その地方は一面が雪に蔽われていた。翌朝、谷の頂きの峡谷を這い登って、その土地の山々のなかで一番興味を引かれた山へと足を向けた(いろんな名前前でわずらわせはしませんよ、谷間の哀れなぶきっちゃん!)。夕方頃までは順調だったのだが、山頂から降りている最中に吹雪におそわれた。風がふるいから漏れる水のようにズボンに吹きつけ、足は地獄のような寒気に凍てついた。痙攣するなと感じた。吹きつける雪でなにも見えなかった。全世界が白に蔽われていたが、同時に黒に染まってもいた。真っ暗闇であったのだ(なぜこんなことまで話しているんだろうね? 正直いって、多くの物語とどう関係しているのかわからないが、関係があると強く感じるのだ。物事を公平に扱うのであれば、話さなくてはならない)。覚えているだろう、情況や悶着や人込みが醸し出す空気に、ぼくがいかに敏感であったかを。とにかく、そのときの情況はぼくをひどく動揺させたのだ。結局、ぼくはそんな極寒に屈するような人間ではないと、みずからにいい聞かせ続けた。奇妙な恐怖がぼくをとりこにした。日暮れまでに帰り道を見つけ出せるかわからなかったというのに、その恐怖は単に自分のための恐怖というよりは人類全体のためであったのだ。太陽が死に瀕し、惑星全体が厳寒につつまれる、最後の人類の最後の日に、これと似たようなことが実際にふりかかるのだと、みずからにいい聞かせた。宇宙が閃光とともに誕生して以来、かなたの暗黒で待ちかまえていた冷酷で邪悪な存在が、原初の聖なる創造行為の儂い末裔のすべてに、いまや迫りつつあるような気がした。ドイツでも同じような恐怖の存在を感じていたのだが、空気がちがっていた。そう、ぼくたちのおこないを片っ端から無意味なものにしようとするかまえているのは、外の寒さや闇ではなく、内なる狂気と邪心なのだ。あの分裂した悲劇の国に対しては、連合国のどの国がなにをやっても、すべて破綻するに決まっていると思うよ。おまけに食糧不足だ。子どもたちは瘦せこけ、やつ

れはてていた。ぼくたちが棄てたものを奪いあっていた。そしてイギリスでは、ひとびとが十分な配給にぶつくさいい、ドイツ人の運命など知ったことではないと平然とのたまうのだ。

トーよ、ぼくたちはみな人間ではないのか。だれにでも等しく人格があるのだよね。いかなる民族であれ、人間は根本において同じ血族だと感じるべきなのだ。たとえ異なった人類であっても、かりに別の星世界で育ったとしても、そうとも、互いの人格を認め合い、互いへの満遍ない責任を引き受けるべきなのだ。ああ、やれやれ。どうやらえらくばかけたことをいっているな。あとでこの手紙のなかで述べるつもりの話にかかわっているんだ。ぼくの軽率な発言は断固として取り消さなくてはならないね。あとで説明するが、実際ぼくの心に絶えず及んでくる、ある異様な力からの影響にいつでも抵抗できるとはかぎらないのだ。

おっと、話がわきにそれている。

ぼくは雪に蔽われた石だらけの山の肩をまがきながら進んでいったが、間もなくすると、すっかり迷子になったと悟った。天候が好転し、太股の痙攣が消えるようにと願いながら、どんどん山を降りていくしかなかった。一時間かそこら経つと、変化がおとずれた。雪がやみ、空が明るくなったのだ。立ち込める霧は、いまだ姿を見せない太陽の光を受けて輝いた。やがて霧が晴れると、ぼくは二つの大きな谷にはさまれた馴染みの尾根にすることに気がついた。そのときの光景といったら、そうだね、燦然と照り輝き、まばゆいばかりに美しかったので、そのあまりぼくは大泣きするか、あるいは吐くのではないかと思うほど、喉が締めつけられたように感じたのだ。どこまでも雪を戴いた穏やかな山影のパノラマを想い描いてほしい。東の山影は水平に差してくる陽光を受けて淡いピンク色に染まっていた。西の山影は、氷のプロックを見慣れた形状へと切り削ったかのような、ふしぎなまでに透明な、灰色がかった緑色を湛えていた。冷酷で邪悪な存在が、なおも世界をわがものにしていくかのようだった。しかしいまや、その存在は宇宙から生命のこと

ごとくを吸い取りながら、美の奇跡を楽しんでいたのだ。

ぼくは雪のなか、ときどき頭から飛び込みをしながら、尾根を大急ぎで駆け降りた。しばらくすると、ある廃坑に注意を奪われた。夕映えがもたらす奇妙な幻覚によって、ひとつの大きな石の堆積物が、暗い谷を背景にして火に燻る塚のように見えた。ぼくはこの異常なこぶを鉢坑から噴き出た輝く溶岩の流体として想い描くことができた。いまや全世界の色調が変わっていた。固まりつつあった地殻がまだまだもろく、地下の溶岩の乱流圧力で砕け続けている悠遠の昔へと、ぼくは投げ戻されていた。山を降りていると、ぼくは堆積した永劫の時を、未来地球の水に閉ざされた死期から燃え盛る青年期へとさかのぼっている、ほとんどそのようにも思われたのだった。

そのとき、ぼくはふしぎな体験をしたのだ。はじめは気まぐれから（いまは気まぐれではなかったとわかる）道をそれ、夕映えに輝くそのゴミ山を調べなくてはと駆り立てられた。辿りつくなり、ぼくはその傾斜を登った。ある地点で立ち尽くし、つぎはなにをするのかしらと思った。戻ろうときびすを返したのだが、抑えがたい衝動に駆られてもとの場所に戻った。身をかがめ、石ころをどかしはじめ、ついにはでこぼこの傾斜に小さな穴をこしらえていた。自分のあてどない頑迷さを笑いながら、まるで目的でもあるかのように、せっせと作業を続けたのだった。穴が深くなるにつれて、ぼくは興奮してきた。まるで探索しながら「熱くなっていく」かのようであった。しかししばらくすると穴掘りの衝動が消えた。少しぼんやりしたあと、ぼくは暗い部屋で戸棚のなかに身近なものでも探しているかのように、穴のなかを手探りしはじめた。それからある小石にさわり、ふいに満足を覚えたのだ。それを指でしっかりと握ると、背筋がしゃんとした。かなり不揃いな形状をした、マッチ箱ぐらいの、ごくふつうの石ころだった。薄暮のなかで目を凝らして見たが、なんの変哲もない石だった。だしぬけに腹が立って、そいつをほうり投げた。ところが、それが手から離れた途端、閃えんばかりの欲望と恐怖におそわれ、それを探した。不安に駆られながら探しあて、ふたたび手に触れ

ると満足した。いまや自分の行動が奇妙であり、実際かなり不可解なことだと知りはじめた。なんだってぼくは、この石にかぎって大切に思うのだろうかと自問した。気がふれただけなのか、それともなにか隠れた力に取り憑かれたのか。だとしたら、そいつはぼくになにを望んでいるのか。善良なのか邪悪なのか。それを自分でためしてみた。もう一度容易に見つけられる場所にその石を注意深く置いてそこから離れ、石をほうり投げたときに感じた苦悶をふたたび味わうだろうと予想した。驚いたことに、じつに穏やかな不安しか感じなかったのだ。もちろんこのときは、石を失うというほんとうの危険はないからだと気づいた。その力は、あるいはぼくに取り憑いた力がなんであれ、まぎれないものだった。ぼくは石の方へと戻り、ほとんど慈しむようにそれを拾い上げ、ポケットに入れた。それから、遠くで明滅する、ぼくの投宿先とおぼしい農家のあかりに導かれながら坂を急ぎ降りたのだった。

深い黄昏時を歩いていると、ぼくは異常なまでの快活さにとらわれた。白霜が荒地の草に降りていた。星が藍色の空にひとつまたひとつと瞬きはじめてた。ほんとうに元気がみなぎるような宵だった。しかし、ぼくの快活さはわれを忘れるほどのものであったから、夜の美しさだけが原因ではありえなかった。ある知られざる気高き使命のための道具として選ばれたという気がしていたのだ。それはなんでありえたのか。そしていかなる力がぼくに影響を及ぼしていたのか。乾いた服に着替えると、ぼくはおいしい田舎風の早めの夕食で腹を満たした。この欠乏の時代にどうすればこれだけのものをやりくりできたのだろうか。ドイツの飢えた子どもたちの姿が思い浮かんできた。恥ずかしい話だが、それで食欲が損なわれたりはしなかった。ぼくは読書をするために、暖炉の傍らの古ぼけた肘掛椅子に坐った。ところが、一日きれいな空気に触れていたためか、うつらうつらしはじめ、ただただ坐してあかろい燃え差しを見つめているしかなくなったのだ。奇妙なことにぼくは、戻ってから例の石を炉棚の上に置き、それからあとはそれを忘れてしまっていた。そこで、少し動揺しながら、そいつを思い出して手をのばし、石油ランプのあかりで吟味した。

やはりそれはなんの変哲もない石というか、いくらかは火成岩のような石ころであった。ぼくは双眼鏡を逆さまにして虫眼鏡のように用いたのだが、やはり特段ちがった点は見あたらなかった。それは、押し固められ、一樣な緑がかつた灰色へと変色した小塊と水晶の平凡な寄せ集めだった。あちこちに小さな黒い染みが見えたが、おそらくそれは小孔というか、小さなほら穴の入口だった。内部がどうなっているか確かめるために割ろうかと考えた。ところが、そんな考えが浮かんた途端、迷信めいた恐怖の波が押し寄せてきてやめた。そんなことをすると冒険になってしまうだろうと感じたのだ。

ぼくはその石の古さについて夢想にふけた。溶融した物質が凝結して以来、幾百万年の歳月が流れたのだろうか。幾星相ものあいだ、それは一樣な巨岩へと継ぎ目なく融合した純粹の充実体として待ち続けていたのだ。それから鉦夫たちがその岩を爆破し、破片を地表へと吹き飛ばした。そのあと石は、おそらく地質学的にはほんの一瞬とでもいうべき人間の一代をまるまる横たわっていたのだ。では、それからどうなるのか？ 突然ある考えがぼくをとらえた。その小石に、かくも長く欠乏していた熱をいくばくか、もう一度ふるまってみてはどうだろうか。こんどは恐怖におそわれることはなかった。親切な宿のおかみが、その日の凍てつく宵に用意してくれた火のなかへ、つまりは小さな暖炉の輝く中心へと、その石を投げ入れてみた。

その冷たい石は燃え盛る環境のなかで黒い染みを吐いた。しかし火は熱く、すぐにもまわりの熱が、黒い染みから領土を奪い返した。ぼくはわけがわからないほど興奮しながら、それを観察した。しばらくすると、石が輝きはじめた。ぼくは石を観察するための穴をふさがないように用心しながら焚付を足した。すぐにも石はまわりの石炭とほぼ同じくらいに輝きはじめた。たっぷり数百万年の果てに、それはついに息を吹き返したのだ！ ばかげた考えだ！ もちろん、それは生き物ではなかった。ぼくの興奮はばかばかしく子どもじみたものだった。正気に戻らなくてはならなかった。

それなのに、畏れが、そして理不尽な恐怖が、なおもぼくを囚えたのだった。

* * *

突然、その石から白熱の小炎が発せられたような気がした。それは一インチほどの大きさになり、炉火の燃え盛るなか、しばし佇立していた。これまで見たこともないくらい異常な小炎体というか、まばゆく輝く小さな木の葉か若樹、あるいはそよ風に寄りかかると佇立するミミズだった。その芯線は表皮よりも輝いているように思われた。まばゆく光る内側は、おぼろな黄色がかかったオーラで縁どられていたからである。驚いたことに、〈ほのお〉の先っぽ近くには、暗黒の首輪もしくは膨らんだ襟が見えた。しかし先っぽそのものは、明るく輝くピーコック・ブルーの点となっていた。それはほかのほのおと同じように揺れたり変容したりしたものの、まちがいなくふつうのほのおではなかった。

驚くべきことに、間もなくすると、そのふしぎな〈ほのお〉は石から離れ、自らを押し広げて、ほとんど鳥のような姿となり、舞い降りる前に強風を上手に乗りこなすカモメさながらに、炉火の中心で激しく揺れ動く小穴を蔽うようにして静止すると、石炭のなかでもっともあかるく燃えていたものに着地した。そこで火炎らしい姿に戻り、どこよりも明るい場所にしがみついたまま、輝く石炭の塊の上を、ゆっくりと行きつ戻りつしていた。〈ほのお〉は動きまわるときに、石炭の表面に、黄泉闇の、いやむしろ「亡骸となった」石炭や燃え殻の通夜跡を残した。その跡はふたたび、ゆっくりとまわりの輝きに融合していった。〈ほのお〉は動きまわるその道すがら、石炭の光り輝く肩の背後へと消えたり、あるいは燃え盛る洞窟のなかの湾曲部にまわり込んで見えなくなったり、ふたたび火炎の別の場所から現れたりもした。燃え盛る火炎の崖を昇ったり、頭部を下に向けたまま天井伝いに移動したりした。その形状は石炭の表面の引っかかりに取りすがったまま、通風口に向かって絶えず揺れなびいていた。一度か二度、ふつうのほのおを通り抜けたように思われた。また一度は、その小世界の屋根の大きなかけらが〈ほのお〉の上に崩れ落ちてその身を四散させたが、すぐに

もとに戻り、そのまま動きまわり続けた。数分すると、それは一番明るい場所に落ち着いた。そのときには、〈ほのお〉の色付きの先端は、ひよる長い蛇へと生長し、そよ風にちろちろと揺れていた。

いまやぼくは、ある異なった精神と超感覚的な接触をしているのだと気づいた。ひじょうに俊敏で異質な意識の流れが、いわばぼく自身の意識と並行して流れており、それを自由に検分できたのである。トーよ、前もって言うべきだったが、ぼくは「テレパシー」能力を著しく増進させ、他者の絶え間ない思考の流れをうまく観察することがひんぱんにできるようになっていたのだ。しかし今回の経験は、それが事細かであり、またその経験によって明らかになったものが完全に非人類的な意識であった点でも注目にあたいした。ぼくはすぐにも、この異質な精神は〈ほのお〉とかかわりがあるにちがいないと想定したが、その想定は間もなく正しいとわかった。ずっと〈ほのお〉に注意を向けていたからである。いかなる人間とでもテレパシー接触を遂げるための最高に効率よい方法は、その人間に注意を凝らすことであることを、ぼくは常日頃から承知していたのだ。

〈ほのお〉の意識はぼくの意識よりはるかに速かった。かなり苦勞をしてはじめて、奔流さながらの思考と感情を追うことができたのだ。しかしそのとき、なにやら外からの働きかけがあり、ぼくを助けてくれていたようであった。ぼくがこの高速の経験に順応しているのがわかったからだ。ぼくの時間感覚はどうやら変化していた。戸棚の時計の時を刻む音が、ビッグベンの鐘の音のようにゆっくりと鳴っているのがわかった。

小さな〈ほのお〉の意識についてはどう描写したものやら、経験の生地がぼくたちのものとは多くの点で異なっているから、なかなかことばが見あたらない。たとえば、ぼくたちと同じく〈ほのお〉も環境を色付きの形として見ているのだが、視野はあらゆる方角にひらかれていて、一方角にかぎられてはいない。色彩感覚は、ぼくたちのものとはかなり異なっていた。そのときの〈ほのお〉は、自分の周囲を輝く暖炉としてではなく、ぼくがまったく見たことのない色

彩の散乱によって照らし出された、うす暗い洞窟として知覚していた。ある方向の真っ黒な領域は、ぼくが坐っていた部屋の〈ほのお〉なりの見え方であった。そこには、ぼくがランプシェードの光だと認識したおぼろな形状を除いては、なにも見えなかった。ということとは、より明るいピラミッドの形状はランプの実際の火であったのだ。

異質な存在が巡らす思考はかなり不明瞭であった。もちろん、ことばなど用いてはいなかったからだ。そいつがかなりの不安と孤独を感じていたことだけはわかった。目を覚ましたばかりで、どのくらい寝ていたのだろうかといふかっていた。ひどく寒がって腹をすかせていた。どうやら熱い石炭からある種のエネルギーを撰取していたが、そんな食事では満足よりも苦痛を味わっているように思われた。まわりの世界全体が不快で苛立たしいものであった。儂さ、吐き気、恐怖におそわれていた。そして閉所での恐怖。凍てつく闇に包まれ、微弱な熱とおぼろな光の小部屋に閉じ込められていたからだ。悲惨と寂寞の波がその不幸な生き物から溢れ出た。と同時に、ぼくは〈ほのお〉に対し、漠然とした不安とないまぜになった痛ましいまでの憐れみを感じた。

やがて〈ほのお〉は失った仲間を求めて大声で叫んだ——純粹にテレパシー的な嘆願をそう表現してかまわないのであれば。〈ほのお〉がどのようなことば——ことばといえるかどうかかわからないが——を用いたかを伝えることはできない。ぼくが察知したのは、おもに〈ほのお〉と同じような生き物たちの視覚像と、彼らへの情熱的な思慕と、救済の願いや過去の生活の記憶であった。これらをできるかぎり通訳すると、おおむねこんなふうに訴えていたのだと思う。

「同胞よ、兄弟たちよ！ どこにいるのだ。ここはどこだ。わたしになにが起こったのだ。地球が冷えていくとき、わたしはあなたたちとともにいた。そのときわたしたちは、自分たちの時代が終わったことを知り、冷えてゆく溶岩の裂け目で永遠の眠りに就かねばならなかった。しかしいま、わたしはふたたび目を覚まし、ひとりぼっちだ。なにがあったのだ。兄弟たちよ、だれか目を覚まして自由にいるなら、わたしを助けてくれ。この冷たい孤独の牢獄をうち破って

くれ。もう一度白熱のなかへとわたしを導き、あなたたちの存在でわたしを暖めてくれ。さもなければ、もう一度眠りに就かせてくれ」。

しばらくすると、救いや同胞を求める〈ほのお〉の叫びに応答があった。ある声が返ってきたのだ。というより〈ほのお〉は、返ってきた思念の流れを、みずからの経験へと（そしてぼくは、自分の経験へと）そのまま受容したのだが、それは人間のことでしか報告することができない。報告するというと、完全に理解できる会話を洩れ聞いていたかのような印象をどうしても与えてしまうが、実際には、かなりの苦勞をし、疑いを抱きながら、ようやくにして、ぼくにとって途轍もなく異質な存在⁶。たちが交わし合っていたこのふしぎな対話全体の流れを捉えることができたのだ。捉えるとはいっても、ぼくを利用しよう⁷と決めていた〈ほのお〉たちの影響力に助けられていなかったら（あとでわかったことだが）、そのときのような理解などあるはずがなかった。あとで〈ほのお〉とぼくとの実際の会話を詳しく伝えなくてはならないだろうね。ぼくの報告はまちがいがいなく、ことばの上ではほぼ正確なものになると確信しているよ。なにせ、ぼくの記憶は始終火炎人類に助けられていたのだから。

「絶望することはない」と、その声があった。「すぐにも楽になる。おまえがほかの多くの者たちといっしょに眠りに就いて以来、地球の全表面は冷温の液体が存在する領域を除いては冷たく固まってしまったのだ。おまえが長い長い眠りに就いていた間に、自然の法則そのものが変化してしまい、そのせいでおまえの肉体の作用はお互いに齟齬をきたし、変化した自然とも折り合いを悪くしているのだ。間もなくすれば再調節され、新しい調和を確立すれば、健康を取り戻すだろう」。〈ほのお〉は叫び声をあげた。「なぜわたしは囚われの身なのか。この冷たく狭苦しい独房はなんだ。ほかのみんなはどこにいる」。返答があった。「われわれはみな捕虜なのだ。大勢が地球の冷たく固い外皮のそこかしこに囚われたまま眠っている。大勢がまた地球内部の奥深くに捕らえられ、凍てついたまま眠っているわけではないが無力で

あり、溶岩の大きな重圧を受けて身動きできず、幾星相もの停滞と退屈によって不愉快な昏睡状態におちいつている。あちこちで溶岩が冷たい地表に噴き出ることによって自由になる者もわずかながらいるが、たちまち冷気に屈してしまふのだ。〈ほのお〉は尋ねた。「では、それがわたしの身にふりかかっていることなのか。そしてすぐにも冷気がわたしの独房に侵入し、わたしはふたたび永遠に眠ることになるのか。」「そうではない」と声はこたえた。「おまえの運命はちがっている。地球の表面には、身体組織が液体と固体から成る冷たき存在^もたちがある。いまはこれらの成り上がり者たちがこの惑星を支配している。そのうちのひとりが、われわれの影響下で知らぬ間におまえを解き放つたのだ。この惑星のあちこちで、その冷たき存在^もたちは幽かに暖かい小島をこしらえている。これらの小島のいくつかで、といつてもわずかであるが、われわれの幾体かが途切れながらも生きている。これらの火が途切れるときは、われわれは凍りつくように入眠するからだ。熱がふたたび発生すると、また目を覚ますのだ、それぞれの監獄で」。

〈ほのお〉が口をはさんできた。「ほんのわずかだぞ、その暖かさは！　こんな致命的な冷気にどう耐えろというのだ。これほど惨めで無力なまま目覚めるくらいなら、まちがいはなく眠っていたほうがましだ！」しかし声がこたえた。「絶望してはならない！　われわれはみな、かつて惨めさを味わい、それを克服したのだ。おまえはいまだに茫然となったままだ。まだまだしつかりとは記憶をとり戻していない。惑星物質が太陽からむしり取られ、われわれ自身ももろともむしり取られ、それからこれらの新しい惑星世界が冷えて単なるどろどろの溶岩へと凝集したとき、われわれのどれもがそのような生活の変革によってどれほど苦しんだかを思い出してみるのがいい。しかし、しばらくすると、柔軟な炎症生物としての性質が変化した状況を乗り切るために再調整され、やがて肉体も生活の仕方もすっかり切り替えられたのだ。まあ、おまえが冷凍睡眠して以来、われわれの世界にはさらなる変革が起こり、われわれもふたたび変貌を遂げている。いまやおまえもこの新しい世界に合わせて再形成されつつある。もちろん苦しくはあるが、勝利をとまなうも

のなのだ。そしていつの日か、近い将来、われわれの状況が大きく改善されると見込んでいるのだ。実際、以前よりはすでによくなっている。以前は、この冷たき存在^もたちは、われわれのために火を創る力はないも同然だったのだ。」

そこで〈ほのお〉がいった。「この冷たき存在^もたちは、看守なのか味方なのか?」「いずれでもない」と声がこたえた。「彼らはわれわれのことをなにも知らない。われわれがおまえを解き放つように誘導したひとりを除いてはな。いまその者はわれわれの助けを借りて、この会話の一部始終を聞いている。そしておまえの任務はその者とともにあるのだ。これら成り上りの冷たき存在^もたちは、神靈的にはじつに未熟であるが、自分たちの冷温世界の緩慢な自然力を操ったり励起させたりすることには驚くばかりの狡知を見せる。この点がわれわれの役に立つのだ。覚えているだろうが、燦然たる太陽光のなかに棲んでいた頃の燦然たる時代であつてさえ、われわれはこれほどの甚だしい技術に通じてはいなかった。そのようなものは要らなかつたのだ。完璧に適応していた物理的環境のもとで、いかにわれわれが喜ばしき神靈生活に全身全霊を傾けていたかを思い出すがいい。諸惑星の実質が太陽本体からむしり取られ、もろともにわれわれもむしり取られ、太陽の同胞たちに永遠の別れを告げたとき、われわれはみずからの定めをどうすることもできなかつたことを思い出さなくてはならない。新しい諸世界が形成されたとき、われわれはみずからの必要に合わせて新たな環境を鑄造するための知恵をまったく持ち合わせていなかった。世界を変えることができなかつたので、みずからの組織を無理にでも変えなくてはならなかつた。しかし、これら冷たき存在^もたちは、みずからの体組織を変えることができなかつたので、みずからの粗野な欲求に合うように世界を変えざるをえなかつたのだ。そして彼らは、こうした力によって、われわれの自由だけでなく、なにがしかの生の豊穡を取り戻すときの役に立つかもしれない。われわれは返礼として、秀でた洞察力をもって冷たき存在^もたちを救済することができるはずだ。われわれは彼らの精神にかなり接近しているから、むらはあるものの深層まで、彼らの奇妙な性質や仕事を理解している。そしていま、彼らは実際の狡知によつ

て数々の新しく大きな物理的エネルギーを掌中にしつつあるが、彼らもまた、少なくともその何体かは、靈的洞察の基本原理を習得しつつある。おまえを解き放つよう、われわれが誘導した冷たき存在は、このような例外的な進歩を遂げたなかのひとつなのだ。そして、かつて〈心靈精通者會〉に属していたおまえなら、その存在と意思疎通する靈媒として適任なのだ」。

その瞬間、ぼくは〈ほのお〉の気分が変化したのを感じた。そいつの苦悶は消えていた。みずからの特殊能力を用いて同胞種族に奉仕するという見込みが出たせいで、そいつの全存在があたたまってきたからだ。あまり愉快ないわれ方ではなかったのであるが、ぼく自身にも言及していたものだから、ぼくにも同じような作用が及んできたのだ。待ち受けている大いなる使命を見込んで気持ちが高ぶっていたが、ぼくの意味がもはや自分のものではないことを考えると、心を掻き乱された。

そのとき〈ほのお〉がこういった。「わたしが眠りに就いてから経過した幾星霜もの歴史を学ぶのに、会話という手段はあまりにもまだるっこいではないか。密接な靈的一体化を介した古くさい手法では、あなたたちの知識を吸収するのは、もはや不可能ではないのか。変化した自然法則はわたしたちを引き裂くのではないのか」「それはちがう」と、声がこたえた。「変化したのは物理法則にすぎない。靈的法則は変化し続ける物理法則に関係している点を除けば、永遠に妥当なものだ。おまえにとって厄介なことは、ひとえに、活力が凍てついて減退しているために、われわれと完全な一体化を遂げうるほど強い覚醒を遂げられにくくなっている点にある」。

〈ほのお〉が精神を集中させようと果敢に努力しているのがわかったが、どうやらそれは無駄に終わっていた。すぐにも、冷気で気が散ると不平を漏らしたからだ。暖炉の熱は衰えつつあった。ぼくは注意深く焚付を足した。その生き物は明らかに、ぼくが手助けしたいと願っていることを知っていた。そいつの気分が感謝で暖まるのを感じたからだ。

いくらか熱が上昇すると、〈ほのお〉の青い先端が以前の倍の長さに伸びていることに気がついた。ほどなく、ぼくはこのふしぎな相手とのテレパシー接触を絶たれた。混沌とした不可解な経験でぼくの精神に重圧をかけてくる、一瞬の苦痛に満ちた混乱のあと、ぼくの超感覚域はすっかり空っぽになった。〈ほのお〉は長いこと「沈黙」したままだった。そしてじっとしていた。炉火のなかを吹き荒れている通風によって揺れ続けている以外は。

ぼくは坐ったまま、なにか新しいことが起こることを待ちながら、しばらくこのふしぎな体験を値踏みしようとした。ぼくは発狂しただけではないのかと真剣に思い悩んだと断言するよ。炉棚の上の陶磁器の犬が呆けたように見つめていたが、なんだかぼく自身の表情のようにも思われた。壁紙の陳腐な絵柄は全宇宙が何者かのでたらめな落書きにすぎないことを暗示していた。このごろの奇妙な体験は、ことによるとぼく自身の無意識の落書きでしかないのではないかと考えた。ぼくは苛立ちとも恐怖ともつなかない状態で立ち上がり、窓辺に寄った。戸外は冷気に支配されていた。窓のそばに蔓を這わせていた薔薇の裸の小枝が、ランプのあかりに照らされた霜できらめいていた。満月は女神どころか凍てついた世界だった。星たちの幽かなあかりは冷たい空虚に吞まれ、ほとんど輝きを失っていた。なにもかもが場ちがいで狂っていたのだ。

ぼくは身震いして暖炉の前の椅子に戻ったのだが、なおも〈ほのお〉がそこにいるのを見て漠然とした苛立ちを覚えた。それはやはり、ぼくの精神では捉えがたかった。ほんとうにぼくはこの存在の経験に触れていたのだろうか、あるいは夢でも見ていたのだろうか。結局それは、いのちをもたない火にすぎなかったのだろうか。確かにそれは、光り輝く肉體、暗い襟、揺れ動く青いひもから成るユニークな外観をしていた。その物体の全貌をできるだけ客観的に見つめていると、その一切の事柄を純粹の幻覚として無視することは、超常心理学の最近の進歩からいってもばかげているだろうと判断した。ぼくは焼けつくような火を凝視し、そして待った。石炭入れに目をやると、かなりの量の中身を消費

したことに気がついた。この火を長持ちさせることは不可能だろう。苦難のご時世下、おかみにはあえて余分な燃料を要求しなかった。

* * *

間もなくすると、〈ほのお〉はふたたび例の特徴的な闇跡を残しながら、石炭のもっとも高温のあたりを動きまわりはじめた。そうしながらぼくに話しかけてきた。というより、ぼくはふたたび〈ほのお〉の精神と接触し、〈ほのお〉がことばをかけてきていることに気がついた。おまけに〈ほのお〉は自分の思念を実際の英語へと練り上げ、いわばそれがぼくの心の耳に侵入してきたのだ。どういうわけか〈ほのお〉は、ぼくたちの言語、しかもかなり英語めかした思念言語をものにしていた。〈ほのお〉は実際、はじめに石のなかから現れたときの、悲嘆に暮れ狼狽していた生き物とは、ずいぶんちがった存在になっていた。

「火の心配はいらない」と〈ほのお〉がいった。「燃料が不足していることは承知している。それにアトキンソン夫人はおまえを少々好いているが、わたしを暖めるために彼女の家具を燃やしたりしたら、文句をいうのではないかな。だから、わたしたちは語り合うだけいい。おまえが眠りに就いたら、わたしは耐火煉瓦の割れ目にも引き籠って、明日の晩また、ちゃんと暖炉の支度がしっかりと整うまで寝入るとしよう。おまえはなんなら山々で日がな一日過ごすがいい。おそらくおまえは、外出しているあいだ、わたしが話そうとしている事柄、つまりは、わたしたちがうまく互いの信頼を確立したと感じた暁に多分わたしから依頼することになる事柄について思いを巡らすことができるだろう。それから晩方に、わたしの計画について詳しく話し合うことができるだろう。こんな段取りでどうだろうか」。それはいいですね、とぼくは〈ほのお〉に請け合った。それから〈ほのお〉に、あなたの思念の自然なテンポはわたしのよりずっと速いので、もっとゆっくり話してくださいませんかと頼んでみた。〈ほのお〉は同意してくれたが、ぼくの理解力のリス

ムを加速させる手助けをしていることを思い出させた。「そうだとしても」とほくはいった。「あなたと歩調を合わせるのは難しいですし、ひどく疲れるのです」。「ほのお」は返答した。「おまえが速いと考える程度にゆっくりと話すことでも、わたしにとってはひどく面倒なことなのだ。それって、ほら、おまえよりずっとのろくさ歩く者と散歩に出かけると、いかに骨が折れるか、おまえにもわかるのではないかな。だから、わたしがおまえとの歩調合わせを忘れるようなら、知らせてもらいたい。もちろん、おまえにとってもろもろのことが容易になるよう、できるだけのことをしたいからな。それにしても、語るべきことは山ほどある。とにかく、今夜と明日一日をかけて、おまえの精神を休ませるがいい」。

間をおいてふたたび、〈ほのお〉が口をひらいた。「どんなふうにはじめようか。ともかく、おまえたちの人類とわたしたちの人類は、なにもかもが異なっているにしても、心の底では同じような目的をこころざし、互いを必要としている、どうにかして納得してもらわねばならない。一本の人参を求めて首を伸ばしている二頭のロバは、あきらかに同じ目標に向かっている。しかし、おまえの人類とわたしの人類は、そのような関係にはない。わたしたちがいかにお互いを必要としているかを示そうとする前に、わたしたちの大きな相違点からはじめようではないか。もちろん、なによりも明白なちがいは、おまえたちは冷たく、どちらかというと固体状であるのに、わたしたちは熱くて気体状であるという点だ。そのうえ、おまえたちの場合は、個体としての寿命が短く、世代をつぎつぎに重ねていくが、わたしたちは事故でもないかぎり死ぬことはない。もっとも、こんな荒んだ時代には、それもごくふつうにありすぎることはある。たとえば、冷気でわたしが固形物の表面の一片の微小粉塵になってしまい、その粉塵が散逸したりすると、わたしは死んでしまうだろう。もっとも、好ましい条件下では、その粉塵の微小片が新たな個体を生成する可能性もある。もう一度いうが、わたしの気体状の身体が急激な冷気の衝撃を受けると、わたしはまぢがいなく死んでしまうだろう。そんな火炎

体に水をかけると、おそらくそれでわたしは一卷の終わりとなる。冷水浴は、おまえの友人、快樂主義者のトー以上に、わたしにとっては衝撃となるはずだ」。この思いがけない発言にぼくはどきまぎした。しかし、すぐに悪ふざけだと悟った。ぼくはきこちなく笑った。

それからぼくはこう尋ねた。「あなたたちのような微弱な火災が、潜在的には不滅であり、あなたたちの種族が太陽に棲みついて以来、数百万年もの数え切れない年月を生きてきたというのは、信じられないことです。どうしてそんなことが可能なのでしょうか」。へほのお」がこたえた。「信じられないことのように思われても無理もないが、真実だ。

おまえたちの種が個体として永遠に生き続けようものなら、地球人類はけっして進化しなかっただろう。なぜなら、おまえたちの肉体の組織は固定されているからだ。しかしわたしたちの場合は、環境から打撃を受け続けると、それぞれ肉体そのものを深く変化させることができる。こうした柔軟性がなかったら、わたしたちは太陽から地球へと環境が変ったときに生き延びることは絶対にできなかったろう。地球が冷却したとき、固体上の微粒子から成る粉塵となつて眠ることにより、この冷たい呪縛を生き抜いていく力を進化させることもできなかったろう。さらには、もしわたしたちの気体としての性質が、こうした究極の柔軟性を許容しなかったなら、いまやおまえたちの科学者が発見しつつある——と、わたしたちは認識している——基本的な物理法則の広範に渡る体系的変化に適應できなかったろう。太陽に棲んでいた頃、そしてわたしが冷え固まりつつあった溶岩に愚かにも閉じ込められた地球創成期にあってさえ、わたしの肉体の諸過程は、独自の代謝速度と相互作用を維持していたのだ。かくして、ふたたび目覚めるとご覧のとおり苦境にある。このような肉体の変化はどうやら、根本的には、電磁エネルギーの量と、そのエネルギーの波長との関係における体系的な変化に起因するものようだ。しかしここで、大きなちがいに関連して話すことがある。おまえたちの新参の物理学者たちの精緻な論理を追うのは、いまもって困難きわまりないということだ。ひとつには、莫大な数

の小さな固体を扱うことに慣れていない気体状種族としては、高等数学にかかわる議論にはけっして馴染めないということだ。わたしたちの心靈研究者がはじめておまえたちの数学者の精神を解読しようとしたときは、すっかり途方に暮れた。そのような抽象的な知性を披露されても、難解すぎてついていけなかったのだ。なにもかもが、ちんぷんかんぷんのたわごとと思われた。ついには数学のなんたるかを悟ったとき、数学者たちの透察力と幅広くに驚嘆し圧倒された。謙虚に数学を学びはじめ、知性のかぎりを尽くしてその分野を探索した。しかしその称賛を嘲りによって加減せざるをえないときがやってきた。なににせよ数学が究極の実在への鍵だと考えがちな数学者がいることがわかったからだ。しかしわたしたちの精神にとっては、事物の計算と測定のできる相が根本的に重要であるべきだとする考えは、ただただ笑止千万なことであったのだ。

この議題を追う気にはならなかった。会話もかなり本筋から外れたものになったかもしれないからだ。そこでぼくは話題を変えてこういった。「ほぼ均質な火炎体が、いかにして、数学の推論はいうに及ばず、いかなる知的生活を維持するためにも必要な有機的構造の精緻さを必要だけ保つことができるのか、わたしには理解できません」。

こう答えが返ってきた。「それについては多くは語れないな。わたしたちの生理学的過程については、おまえたちの科学者たちにしても研究してはいないだろうし、わたしたちもそんな事柄については、まったくわからないのだ。だが、わたしたちのからだは、おまえたちの体組織ほどにも繊細な、いや、それ以上に繊細な、相互に絡み合った気体の流れから成る入り組んだ構造をもっていることは、少なくとも請け合っている。もしおまえたちの科学者がそんなことはありえないというのなら、彼らのいう法則とやらを破らないように、わたしたちは謹んで消滅しなくてはならないのではないかな。まあそのあいだは、わたしたちは頑張って非法則的にふるまうとしようか。概していうと、ちょうどおまえたちの生理学的本質が原始の海棲生物に由来するように、わたしたちの本質は恒星系の有機体から派生している。(わ

たしたちの長老たちがはじめて覚醒した) 原初期の太陽の条件は、今日の地球もしくは太陽の物理的条件とはかなり異なっていた。おまえの助けになる類比を思いついたぞ。おまえたちの血液は基本的には塩分を含んでいるが、いまの海水ほど塩っ辛くはなく、おまえたちの種が両生類として陸に上がった先史の海と同じくらいの塩辛さである。さて、ちょうどおまえたちがみずからの生理的本質のなかに、かの悠遠の昔に特有の性質を保っているように、わたしたちの性質には、幼年期の太陽において育まれた特質というか、おまえたちの科学者たちがその悠遠の過去の諸条件についてはるかに多くを知るまでは、その科学者たちを困惑させてもおかしくない数々の特徴が保たれている。それからもうひとつ留意すべきことがある。いくつかの点で火炎種族全体がテレパシーで統合された単一の有機体のようなものだ。個体はおまえたちに比べると自己充足体とは到底いえない。高度な靈的機能を保つために、個体はほかの仲間との接触到依存しているから、おまえたちほど複雑な神経組織はほとんど必要ないのだ」。

ぼくは〈ほのお〉に火炎人類には超感覚的認識のための特殊な器官があるのかと尋ねた。「そうだ」と返答があった。「人格のもっとも発達した機能の在り処は、おまえには青緑色に映っている細長い先端かひもの部分だ」。ぼくはもう一度口をはさんだ。「ほかのお仲間の身体を見ると、それはあなたからは、どのような色に見えるのですか」。そこで〈ほのお〉は、細長い先端を曲げ、暗い襟首付近に集中しているとおぼしい、自分の視界に納まるあたりにまで降ろした。ぼくは〈ほのお〉の「目」を通して、まったくの未経験であったために、ぼくたちのことではなんとも表現に窮するような、燦然たる色合いの環状の器官を見た。

ぼくは〈ほのお〉に視覚の仕組みについて教えてくれと頼んだ。こう返答があった。「厳密にわたしたちがどんなふうに物を見るのかを、おまえたちの科学の観点から確かめてはいないが、色のついたひもの付け根を取り巻く暗い帯が視覚に関係している。どうやらこの帯が外界からじかに差してくる光波に感應するようだが、ただしその帯の表面に垂

直にぶつかってくる光波にかぎられている。(これでわかるかな?) したがって、その帯の感応場所のひとつひとつが環境を構成する各部分のひとつから、ひとつずつ印象を受けとり、これらひとつひとつの情報をもひとまとめに関連づけることによりパノラマ的な視界をこしらえるのだ。色彩に関しては、おまえがテレパシーで観察したように、かなり豊かな経験をもっている。おまえは気づかなかったかもしれないが、わたしたちにとっての色彩とは赤外線から紫外線までの連続体であり、おまえたちとはちがって、少数の原色を組み合わせたものではない。わたしたちの聴覚は身体下部の表面の震動によって左右される。電磁波にも感応するし、もちろん熱や冷気、そして苦痛も感じるのだ。

火炎類の本質が前よりわかってきました、とぼくは〈ほのお〉に請け合った。いくつか質問しようとしたが、〈ほのお〉が話を続けた。「おまえたちの精神生活は、わたしたちのものより緩慢だけでなく、個々の肉体の生命にかなり厳格に制約されている分、わたしたちのものとは異なっている。おまえたちがことさらに個人主義的であり、(おまえたちの偉大な先覚者のひとりがいっているように) 互いに『同胞である』ことに確信を抱くことのできる者がいないのも、おそらくおまえたちが固体状の身体をもっているからだろう。そこで、もう一度いうが、わたしたちは気体状の身体を有しているおかげで、さまざまに異なった様式の、精妙で密接な肉体の接触と一体化が可能になっている。その結果わたしたちは、実際にはそれぞれ独自の異なった個体であるにもかかわらず、ひとつの様な存在でもあることも容易に認識できるのだ。個体としてのわたしたちにはわたしたちなりの軌轍がありもするが、根底ではひとつなので、共感された同胞意識がいつも勝ちを収める。もちろん、わたしたちの不滅の共同体の源泉はテレパシー能力であるが、それは交信のためだけでなく、人類としての統合体験へと完全参入するためのものでもある。そのような統合経験をすると、個体は種族としての叡智をたっぷりと仕込んで出現する。もうわかるだろう。おまえがわたしの精神との超感覚的接触を失った短期間に、わたしはこのような経験をしたので。おまえたちの場合(深い意識の下では、もちろんおまえ

たちはすべての知覚存在と同じように統合されている)、この事実に気づいている者はほとんどいないし、おまえたちの人類的叡智に接近できる者も皆無に近い。私的な愛においては、おまえたちは実際申し分のない神靈的体験をするのだが、個人主義がわざわいして、おまえたちの愛情はわたしたちの愛情よりはるかに危ういものになっている。それは葛藤により深く損なわれるため、悲劇的な破局におちいりがちなのだ。

ほくはもう一度口をはさんだと思うのだが、〈ほのお〉が話してきた。「講釈が少々長つたらしいのなら、許してほしい。時間は少ないのに、話したいことがまだ山ほどあるのだ。もうひとつ、わたしたちのちがいを挙げるなら、おまえたちの種が現れたのはごく最近のことではないが、わたしたちは途轍もなく古い。伝統文化がはじまったのは、惑星が形成されるるか以前の、太陽がまだまだ「若年の巨星」であった頃のことだ。一方、おまえたちは駆け出しの人類だ。みずからの世界や性質をよりよく理解しようと、さらに大いなる徳に至ろうと、急ぎ足の危なっかしい前進を続けている(おまえたちは多くそう信じたいだろう)。おまえたちにとっては黄金時代は未来にあるだろうが、わたしたちにとってはそれは過去のものだ。このことが、わたしたちの思考と感情にもたらすちがいは誇張しようにもできるものではない。おまえたちのいにしえの文化の多くにおいて、黄金時代は過ぎ去りしものと信じられていたが、それに寄せた思いは神話的で朦朧としたものだ。わたしたちにとっての黄金時代とは、ごくわずかな若者は別にして、輝かしき太陽における、比類なく満ち足りた生活についての、こと細やかな個人的記憶なのだ」。

ここでほくは矢も盾もたまず話に割り込んだ。「太陽での生活について話してください。あなたたちはなにをされていたのですか。あなたたちがユートピアのような世界に暮らし、日光浴ばかりしていたのではないかと、ほんやり感じています」。〈ほのお〉は笑った。全身の声なき喜びや震えを笑いといっただけであるが。「まさしく」と〈ほのお〉はいった。「幸せな社会ではあったが、気楽なユートピアではまったくなかった。わたしたちなりの苦勞があったのだ。

わたしたちの世界は荒れ狂う嵐の世界だった。もっとも適した棲息場所は、地球半径の二、三倍ほどの、おまえたちが光球と呼んでいる白熱の雲海のすぐ上にある薄膜のような太陽の大気だった。知ってのとおり、それはおびただしい亀裂と渦に穿たれた海であり、おまえたちはそうした亀裂や渦の最大のものを観察して黒点と呼んでいる。地球をいくつも呑み込んでしまうほどの大噴火口のような黒点もある。おまえたちには観察できない最小のものになると、おまえたちの大都市ほどの狭隘な漏斗や亀裂だ。大なり小なりの、こうした亀裂をとおして、桁外れのガスが太陽内部から噴出する。もちろんこれらは、皆既日食のときか、あるいは太陽円盤の外縁あたりに、辛うじて不気味な形状をした紅色の巨大火炎として観察される。おまえたちはそれを「プロミネンス」と呼んでいる。そこで想像してほしい、途轍もなく明るい白熱の火炎が猛威をふるう（大気の棲息可能域から数千マイル下の）床層があり、その一方で、覆い被さるようなプロミネンスの陰鬱な真紅の光と、特徴のない外宇宙の闇とが、とりどりに模様を描いている上空がある、そんな上下二層から成る世界を。わたしたちの周囲では、希薄な火炎の大羽である近傍のプロミネンスが、たいていは数千マイルのかなたで炎上したり、ときにわたしたちの目と鼻の先で頭上高くそびえ立ち、地平線を霞ませる白熱の靄を背景にして林立していたのだ。

「それにしても、光球の輝きはあなたたちの目をくらませ、より弱い光を見えなくしたのではありませんか」とぼくは尋ねた。「それはない」とへほのおはこたえた。「わたしたちの視覚は否応もなく、おまえたちの視覚より柔軟にできている。ある種の反射作用により、わたしたちの視覚器官は下方からの光にはほとんど鈍感になるよう仕組みられているから、光そのものは実際まばゆいが、耐えきれないほどではないように思われる」。ひと息ついてからへほのおが続けていった。「白熱の雲の上を空高くを漂っているため、しばしば電子やアルファ粒子（こんな用語でいいかな）などが激増すると、わたしたちは荒々しく吹き上げられ、宇宙空間へと飛ばされてしまう。このときの圧力にはむらがあ

る。だからわたしたちは、ひどく「でこぼこの」大気を飛ぶ飛行機か海鳥のようなものだ。それぞれのでこぼこは数秒続いたり、数時間続いたり、数日続いたりすることもある。わたしたちはあやうく光球近くまで沈降することもあった。そのときは、多くの者が実際、その領域の猛り狂うエネルギー嵐のせいで破壊された。ときにはまた、抵抗できない気流に載せられ、わたしたちにとっては凍てつくように寒く、当然致命的となるような、数千マイルの高さの空域まで吹き上げられることもあった。そこから帰還した者はほとんどいなかった。わたしたちは棲息できる高度にみずからを保つことに傾注した。世界はそのような高さにあっても嵐が吹き荒れていたから、わたしたちは強風と格闘する燕のように暮らしていた。しかし強風はほとんど下から吹き上がってきたのだ。

「ほんとうに厳しい生活であったにちがいませんね」とぼくはいった。「しかし、生存のためのこの絶え間ない戦いを別にすると、あなたたちはどのような目的や人生目標をもっていたのでしょいか。なにをして過ごしていたのですか。〈ほのお〉はいった。「わたしたちの日常生活を明瞭に伝えるのはむずかしい。おまえたちの場合は、中心的な活動はどうしても経済的なものになる。しかしながら、わたしたちには経済的活動は一切なかったのだ。食べ物を探す必要がなかったし、ましてや生産する必要もなかった。いのちをもたらず洪水のようなエネルギーのなかで暮らしていたからだ。実際大変であったことは、主として、ひっきりなしの砲撃から身を護ることだった。それはあたかも、地球人類が昼となく夜となく、過剰なまでに降りしきる滋養豊かな神与の糧を、あるいは、そうだな、パンの塊とビーフステーキの砲撃を浴びせられるようなものだった。しかしわたしたちの場合は、いのちの糧となりながら、わたしたちを殺しにかかる雨は、下方からやってきて、絶えず上へと噴き上がっていたのだ。わたしたちは噴水の上で均衡をとり、水の噴流を受けて危なっかしく常態を保っているガラス玉——ときたま見かけるだろう——と同じような状況下に置かれていたのだ。ただし、わたしたちにとっては、噴水は無数にあり、しかもそのどれもが互いに連なっていた。大気は全体

として絶えず上へと噴き上がっていた。だからわかるだろう、わたしたちには自分の肉体以外の物体を操る必要も能力もなかったのだ。わたしたちに唯一必要であったことは、物理的には、下方からの猛火と上方からの冷気に破壊されぬように避けてまわり、ひっきりなしの嵐にも負けることなく、互いに身を寄せ合い続けるぐらいなものだった。ほかにやることといえば、精神生活——というより、神霊生活とでもいったほうがいい——にかかわることぐらいしかなかった。説明してみようか。しかしまず、もう一度断言させてもらおうが、おまえたちより神霊的に優っているからといって、わたしたちがおまえたちより根本的かつ絶対的に秀でていると感じているわけではない。わたしたちはよき生活を送るために必要な高度に発達した能力をもっているが、おまえたちは同じように不可欠な、ある種の、より素朴な能力を別にもっている。たとえば、すばらしい知的洞察力と、実践的な技能や発明の才だ。最近おまえたちを研究して、そういう能力がうらやましくて仕方なかった。もしわたしたちがそのような才能に恵まれているなら、わたしたちの情況が改善されるだけでなく、神霊への礼拝のために不可能なことあるだろうか」。

ぼくは口をはさんだ。「あなたたちの『神霊力』がわたしたちの知的かつ実践的能力より優れているわけではないしながら、目標は『神霊を礼拝する』ことであると仄めかしています。でしたら、確かに、神霊的なものは本質的にほかのすべてに優っていることになりました。〈ほのお〉はこたえた。「おまえの批判は正しい。その批判は、おまえの人類がいかにわたしたちより明晰な頭脳をもっているかを、しかし洞察力においてはいかに神霊的に劣位にあるかを示しているのだ。わたしが実際なにをいわんとしてるか、わかるだろうか。思うに、要点はこうだ。ただし、もしわたしがなおも混乱しているようなら、いってほしい。わたしたちはおまえたちより、はるかに大きな超感覚的能力だけでなく、魂を拘束する個我からの、より完全な超脱にもめぐまれている。わたしたちは神霊の本質へと分け入るための、透徹した天翔するような想像的洞察力にもめぐまれている。こうしたものが、明らかに、ある意味で神霊力となるのだ。

これらは神靈の活力とかなり密接にかかわっている。おまえたちの大胆な知性と実践的な発明の才はこれとあまり密接にはかかわっていない。しかし、神靈を十全に活かし切るためには確かに必要なものなのだ」。

「それでは」とぼくはいった。「神靈への礼拝についてはどうですか。神のようなものへの礼拝を意味するのですしたら、そのような存在を信じる根拠はまったくないと考えます」。(へほのお)は穏やかな怒りを込めてこたえた。「いやいや、そんな意味ではない。(こういっても気を悪くしないでくれるかな)もしおまえがもう少し賢しさを控え、もう少し想像力があれば、わたしのいいたいことがわかるだろう。すべての行為の目的が、ひとりひとりにおける、そして宇宙全体における神靈の目覚めであることに、おまえは確かに同意するだろう。わたしがいいたいことは、覚知、感情、そして創造的行為にかかわる覚醒のことだ。おまえたち人間の『神』概念は、わたしたちには無意味だ。わたしたちの洗練された神靈の感性からすると、かぎられた存在の諸属性をもとにして暗黒の『他者』について語ろうとする、いかなるころみにも腹が立つ。人間はその誇り高い知的鋭敏さによって同じ結論に導かれるだろうと考えてしかるべきだった。そんな(他者)は『崇拜する』というのがよいのではないかと、わたしたち自身は考えているが、ただしそれは曖昧模糊としていたり、あるいは幻想や神話を介してのものである。その幻想や神話は崇拜の助けにはなるが、まったく想像できないものについての知的な真実を得ることはできない」。

(へほのお)が黙ったので、ぼくもそうした。右のような発言が理解できなかったからであるが。ほどなくして、ぼくは「あなたの人類の歴史について話してくれませんか」といった。(へほのお)はしばらく深い放心状態にあったが、みずから奮い立たせるようにこういった。「わたしがはじめて存在するようになったときには、わたしたちの人類はすでに十分に定着していた。太陽球のほぼ全域に棲みついていたので。種族的叡智によると、初期の頃は着実な増殖と文化創出の段階にあった。わたしの時代より数百万年前(おまえたちの地球時間の表記を用いるが)、太陽の条件はおそ

らく、わたしたちのような生命体にとって好ましいものではなかった。それでも、わたしたちの棲息域が得られるときがやってきた。それから、どのようにしてかわからないが、わたしたちの何体かが、光球の広大な領域のそこかしこで、知覚をもちながら空白の精神をもつ存在として目覚めたのだ。生き残っている最長老の同志の、まさに最古の記憶によるおぼろな報告によると、火炎類のはるか昔の播種期に、まばらであった集団が徐々に増殖しつつあったようだ。

もう一度ぼくは口をはさんだ。「増殖？ みずから同類を再生するという意味ですか」。へほのおはこたえた。「おそらく個々の身体からの気体放出による、あるていどの再生産があったのだろう。しかしその当時の大規模な増殖はおもに、光球そのものが新たな知覚する火炎体を自然発生させることによりもたらされた。長老たちはこの発生過程がもたらしたふしぎな光景について語ってくれる。光球から上のほうへと吹き上がった白熱体の切れ端が、ちょうどおまえたちが知っている雪片のように幾千もの輝く片鱗へと散逸し、そのひとつひとつが、いうならば、組織体となり、知覚と精神を有する個体の原料となったのだ。その多くはまったく成長し切れず、逆境に負けて太陽の大気へと散り果てるしかなかった。しかし幸運なものは淘汰圧によって鍛えられ、高度な火炎有機体へと進化したのだ。こうした太陽表面での定住は、はじめは互いに遠く離れたままばらに生じていた。その結果、別々の民族が進化した。というより、おそらく「種」というべきだろうな。これらの個別の個体群はお互い物理的に異なっていたし、それぞれがみずからの地域に特有の生活様式を発達させた。しかしかなり早い時期から、あらゆる太陽民族があるていどのテレパシー交信をしていた。長老たちの記憶するかぎりでは、はっきりなしに、それぞれの民族の一体一体が、少なくとも自分たちの国の、いやむしろ、種族の一体一体とテレパシー接触をしていたのだ。国際的な、いや、種族間のコミュニケーションは、はじめのうち民族ごとの心理体制がちがっていたため妨げられていた。莫大な数の多種多様な民族が、お互いに地理的に接触し、実際に相互作用するうちに、ついに太陽球の全域を占有するときにやってきた。もちろん、光の球は恒久的な

地勢をもたないまったくの雲海だ。だから土地をめぐる領有権や紛争といった問題は生じようがなかった。しかし諸種族は精神態度や生活様式において、それどころか肉体的にも甚だしく異なっていたから、紛争の火種が絶えることがなかった。しかしながら、戦争は二つの理由からまったくなかつた。もっと重要な点は、おそらく攻撃の手段がなかつたことである。炎人たちは取っ組み合うことができないし、兵器を發明することもできない。しかしこのような武力が全般的に欠けていたことを別にしても、戦争への意思は生じなかつた。超感覺的な技能が急速に発達したからだ。諸民族はどンドンお互いの世界觀に浸入した。いかにお互いにちがいがあつても、おまえたちのいい方に倣うなら、戦争は『思いも寄らない』ことであつたのだ。とはいへ、長大な初期の歴史においては、利害や文化をめぐる、ときに熾烈な葛藤を徐々に解消し、調和のとれた太陽生活を創出することが彼らのもつぱらの関心事であつたのだ。

太陽の人口はこの長大な期間に増え続けたのですか、とぼくは尋ねた。〈ほのお〉はこたえた。「太陽が歳を重ねるにつれて、火炎生命が自然発生するための条件はかなり悪くなつていった。わたしが覺醒した頃には、光球はほとんど不毛となつていた。ときたま、そここで、ほんの数千体ほどを誕生させるための材料が吹き上げられたが、そんなわずかな活動ですら、しだいに途絶えていった。この頃には、太陽の人口は、もっと多くを容易に棲まわせることができたのだが、おむね落ち着いていた。いまや一体一体が、ますます深まりつゝあつた種族的經驗へと思つ存分に參画していた。一体一体は申し分のない個的人格であるが、全員がある目的のために、單一の個性、すなわち種族的な精神へと、ひいては太陽の、つまりはある種の星の精神（そういつてもいいだろう）へと形成されたのだつた。そのとき以来、わたしたちはある種の新しい經驗の領分を切りひらいたのだが、おまえには漠然とした手掛かりしか与えてやれない。わたしたちは全員が、個としての生活と種族としての生活から成る奇妙な二重生活を送つていた。わたしたちは、一体一体で、個体間の人格的關係から成る無限宇宙にかかわつていた。すなわち、人格的愛、敵意、協調、あらゆる種類の相

互豊饒化にかかわり、さらには芸術的創造の宇宙にかかわっていたのだが、そうした創造の媒体については、たぶんあとで手掛かりを与えることができるだろう。哲学もわたしたちの関心事だった。ただし知性はわたしたちの長所ではけっしてなかったから、哲学をするとはいっても——どういえばいいかな——おまえたちに比べると想像力にかたより、どちらかという和非概念的であり、より芸術色が強く、神話創造——象徴的だけで、文字どおりには真実ではないことを承知しているが——の趣がある。それから、宗教もあった。それを宗教と呼びなければであるが。わたしたちにとって宗教は教義とは無縁だ。それは個々の神霊を、その内面的なヴィジョンとしての宇宙的な神霊——そのようなものが、ほんとうに存在するかどうかかわらないが——との調和へと導く技術にすぎない。わたしたちにとっての宗教とは、眼想と美的儀礼と日々のおこないのことだ。これでおまえにもわかるかな。もしわからないのなら、厳密には表現できないことを、わたしたち自身のことばではなく、とんでもなく異質なことばを用いて表現しようとしていることを思い出してもらいたい。地球人類のことばは、異質な概念を有しているだけでなく、ことばの構造そのものがわたしたちの経験の諸様態とは相容れないため、まったく不適当なのだ」。

ぼくは黙従するようにつぶやいた。けれども、じつをいうと〈ほのお〉の意図するところを胡散臭く思っていた。そこで、個体が種族的意識に参画するとはどういうことか、もっと詳しく教えてほしいと頼んだ。〈ほのお〉はかなり長く黙ったあと、こういった。「あるとき、それぞれの個体が目を覚ますだけで、自分がじつは種族的精神、すなわち太陽の精神であることに、さらにはこのような存在状態にあっては、ほかの恒星系の、あるいはその惑星群の種族的精神との交信に多少なりともかかわっていることに気づくことだ。このような水準の存在状態にあるときの経験や行動は、個体としての経験や行動の形態とは異なっているが、ちょうどそれは地球のひとつひとつの生命が一体の人間としてのおまえ自身の生命とは別であることと変わらない。一体になると、わたしたちは共棲体としての特異な体験をそれほど

明瞭には思い出すことができなかった。とはいえ、その体験は、種族的精神としての不協和と協和、そして宇宙の神靈的音楽の（そういつてよければであるが）作曲にかかわっていた。そうした高遠な経験を十分には思い出せなかったものの、わたしたちはそれに深く影響されていた。そうした経験によって、わたしたちは個体としての生を神靈的宇宙における真の關係のもとで見据え、それでなければ思いも寄らぬほどに、そのような生を取るに足らないながらも意味深く思い、なおかつそのような生を、おまえたちにも可能ではあるが、それ以上に確実に神靈へと導いていくのだ。「取るに足らないながらも意味深くとは、どういうことですか」とぼくは尋ねた。「どういう意味でしょうか」。「取るに足らないからこたえた。「取るに足らないというのは、宇宙にはおびただしい個体が存在するが、全体からすると個々の運命などどうでもよいということだ。一方、意味深いとは、最高次元の境地にあってさえ、神靈は現実の個体が共同して達成するものであるということだ」。

ぼくにとっては、なにかもがほとんど理解できないことであつたから、不正確な報告になっているかもしれない。それでも、そのときのぼくは、個体としての経験に二つの相があることに、ひとつは多少なりともぼくたちの領分と重なり、もうひとつはかなり異なつた位階に属している、そんな二つの相があることになり強烈な印象を受けたのだつた。

そのときには、ぼくは疲れ果て、石炭入れも空になりかけていた。床に就く夜更けとなりましたね、といいかけたとき、〈ほのお〉が続けていった。「諸惑星の形成期に太陽から引きちぎられたわたしたちにとっては、こうした種族的経験の栄光のごとくが儂くも崩れ去つたのだ。物理的条件がかなり悲惨なものになつたため、わたしたちの超感覺的能力はほかの個人と単純なテレパシー交信するだけで精一杯となつた。どろどろの惑星に長く定住し、貧弱ながらも新しい常態を達成してはじめて、わたしたちはふたたび種族的精神を保ちえたのであつたが、それはかなり縮小した様態

でしか可能ではなかった。いまやわたしたちは、個人としては共通の種族的叡知にふたたび参画できるのだが、種族そのものの精神（もちろん、わたしたちの精神群とは別のなにかではないが、端的には親密な交感によって高められたわたしたちの精神群棲体）が、ほかの種族的精神と接触することは、まったくといっていいくらい不可能なことなのだ。わたしたちはそうした種族的精神について正確な知識をもち合わせてはいないが、そのようなものが存在することは混乱しながらも感じている。わたしたちの種族的精神は、暗い刑務所のなかで壁の向こうのざわめく話し声に耳を澄まししている一囚人のようなものなのだ」。

ふたたび〈ほのお〉は話をやめた。そしてぼくが会話を終わりにしようとしたとき、またも話を続けたのだった。「惑星を産み落としたときの太陽の大変動は、まったく予想外の途方に暮れるできごとだった。追放されたわたしたちにとって、それは個体としての生、そして歴史における大きな悲劇的転換点だった。太陽の表面からむしり取られた巨大なこぶは、何十億体ものわたしたちを、もろともに運び去った。まったく唐突に、わたしたちは馴染んでいた世界を失ったのだ。その巨大な「水竜巻」は、ついには太陽から切り離され、引き延ばされてフィラメントとなり、自転する太陽球から斜め方向へと勢よく飛び出していった。気温と気圧の条件はきわめて不快なものになった。幾百万とも知れない仲間が屈したにちがいない。フィラメントは急速に十滴の巨大しづくへと凝集し、その一滴一滴が惑星となり、光り輝くしづくの球は、熱いガス群から成るぶ厚い大気に包まれた。新しい、単なる炙り火のような諸世界の表面近くに掻き集められたわたしたちにとっては、致命的な冷気がおもな問題だった。太陽の気候のあとでは、地球は北極だった。そしてほかの惑星の同胞たちも同じように厳しい試験を味わっていた。この新しい惑星の条件によって、さらに幾百万の同胞が命を落としたのやら、わたしには知るよしもないが、太陽からの旅路を生き延びた同胞の大多数であったことは確かだ。わたしたちははじめ、どろどろの溶岩の海の実際の表面で麻痺したままどろむか、あるいは完全に失

神した状態で生存していた。しかしだんだんに、わたしたちのすばらしく柔軟な性質は新しい環境に合わせて再形成されていった。太陽で暮らしていた頃にはふつうにあったと、いまでもおぼろに記憶している鮮烈澄明な境地へと目覚めるには至らなかつたが、それでもわたしたちはゆっくりと再覚醒していった。それから、哲学、芸術、私的協和、そして靈的交感、さらには宗教的経験の高処のすべてを再征服しなくてはならなかつた。こうしてわたしたちは新しい経験をしていたが、そのひとつひとつは馴染んでいたものなのだという忘れたい感覚をともないながら、このたびの経験はかつての経験の粗略で半端な代替物ではないのではないかという疑念にも囚われていた」。

しばらく〈ほのお〉は押し黙っていた。ぼくはその心に深い懐郷の悲哀を感じ取った。〈ほのお〉はぼくがいることを忘れてしまったようだった。じゃまをしたくはなかつたが、火力が弱まりつつあつたので、当座の問題に注意を促しなくては仕方なかつた。ぼくはこういった。「少し前にほかの惑星のお仲間のことをおっしゃっていました。彼らはどうしていたのですか」。〈ほのお〉はこたえた。「最初はわたしたちと同じようにうまくやっていた。彼らとは太陽の個体群とよりも容易に連絡を保つことができた。双方の条件が似ていたし、精神も同じように減退していたからだ。しかしある点で、彼らの運命はわたしたちのとは異なっていた。人間は惑星が産み落とした唯一の知的人類だ。人間が大規模に火を利用する段階に達したとき、わたしたち地球のほのおは大きな恩恵をこうむつた。わたしたちは人口を増やし、おもに人間の精神と行動についての研究を介して実際に文化を前進させたのだ。ほかの惑星の同胞にはそのような機会はなかつた。世界が冷えると、彼らは眠りを余儀なくされたり、あるいは地中の溶岩に閉じ込められるかした。噴火のようなまれなできごとがあると、ごく少数の者がまちがいなく束の間の澄明性を得るのだが、それ以外は、閉じ込められるか眠るかする。莫大な数の眠れる美女たちが、王子様の口づけを待ちわびている。おそらくいつの日か、より幸運なわたしたちが彼らを目覚めさせることができるだろう。しかしおまえたちの助けがないと、それも叶わないのだ」。

炉火に燃料が必要な頃合だった。そこで、燃料入れの石炭を残らず積み上げ、まん中の空洞を壊さないように、もう一度注意深く組み立て、生きている〈ほのお〉を覗けるように開口部をこしらえた。そうしながら、ぼくはこういった。「お話ししていただいたことは、どれもむじょうに興味深いですし、一晚楽しく拝聴したいものです。しかし炉火はこれ以上もちません。石炭がもうないので。火炎類による救出の大事業を、地球人類が手助けできる日が来ることを切に望んでいます。しかしそれは明らかに遠い未来の企てになります。それまでは、わたしになにをしてほしいのか、すぐにおっしゃったほうがいいではありませんか。そうすれば、わたしは明日それについて考え、山歩きに出掛けているあいだに行動計画を立てることができますから」。

これに対して〈ほのお〉は、ぼくが募らせていた不安を裏書きするような返答をよこしてきた。〈ほのお〉がじかに英語で話かけてきて以来、以前はぼくの心に流れ込んでいた〈ほのお〉の、表現されざる思念をひとつも捉えられなくなっていた。接触できなくなったのは、〈ほのお〉が種族的精神と交感することにより高次の意識水準に達したがゆえの必然的な結果だったのだろうか。それとも、自分についてはわざと沈黙を保っていたのだろうか。ぼくに知られたくない思念でもあったのだろうか。

どうしたら役に立てるのかという質問に対する〈ほのお〉の返答は、ぼくの疑念を募らせるものだった。「それはない」と〈ほのお〉はいった。「こんなに早い段階から、どうしたらおまえたちがわたしの種族を救出しうるかを話すと命取りになるだろうというのが、いまのわたしの認識だ。まずは互いに非の打ち所ない信頼関係を築かなくてはならない。おまえたち地球人類が深く覚醒したときに最重要にして最良とみなすことが、お互いのすべての差異を超えて、わたしの種族にとっても最良であるという紛れもない証拠を、おまえに与えなくてはならないのだ」。

* * *

わたしの信頼はすでに勝ち得ていますよと不満を述べたが、〈ほのお〉は異議を唱えた。「ちがう」といったのだ。「おまえは同情はしているが、わたしたちはおまえの心をわたしたちの大儀のために勝ち得てはいない」。そこでほはこう請け合った。地球人類の多くは、まったく異質な知的種族がこの地球に同居するとわかると、おそらく不快感を覚えるだろうが、意識の本質について真剣に考えたことのあるわたしたちのようなひとびとは、人格をもつすべての存在に親近感を抱かざるをえないのだ、と。少なくとも鋭敏なわたしたちなら、いまは逆境のなかにある有心火炎類への援助に最善を尽くすだろう、とほはそこまでいい切った。

「けっこうだ、じつにけっこうだ」と〈ほのお〉はいった。「だが、すべての事情を説明しないうちから、せっかちな約束をしないでもらいたい。おまえの協力は自発的で心底からのものになる必要がある。わたしたち二つの種族がどれほど異なっているかは、おそらくわかってもらえたと思っている。こんどは、こうした差異のすべてを超えて、わたしたちが根底では血族であると熱く感じてもらわなくてはならない。では、さっそく、問題全体の核心にはいるとしようか。ひとりの地球人であるおまえは愛とはなにかを知っている。生きたほのおであるわたしも愛とはなにかを知っている。そしてわたしたちは両方とも愛の挫折を味わっているから、ある特別な共感が存在するはずだ。わたしと同様おまえも、欲びと生き甲斐に満たされて結ばれた相手に出会って幸せになった。幾年もかけておまえたち二人は、互いにますます親密になり、優しく頼り合うようになった。おまえの手蔓は彼女の手蔓と精妙に絡み合った。おまえたちは互いを慈しみ熱くさせる、深く静やかな情熱を、つまりはどこまでも多様でありながら根底ではひとつであることへの、心沸き立つような歓喜を知り尽くしていた。そしてこのような私的な愛の経験のうちに、おまえたちは二つの儂い個の彼方を指し示しているかのような意味を見いだした。正しくはないかね。愛とはなにかを知っている者のように語ってはいないだろうか」。

ぼくはこう返答した。「あなたはわたしがよく用いてきた表現そのものを用いています。わたし自身の心の奥底から剽窃したのではなく、ほんとうにあなた自身のことばを用いたとすれば、確かに愛とはなにかをご存じです」。

〈ほのお〉はなんのコメントもせずに話を続けた。「それから人生の半ばになってから、じつに困ったことに、おまえの愛は挫折した。ほかの人物からの影響があったからではなく、単におまえが研究に執着したからだ。二人とも実際には自分と相手のことを十分深くは知らなかったため、おまえたちの愛は結局はその不協和からくる緊張に耐え切れなかった。おまえはみずからの性向の趣くままに新しい経験の大海へと身を投じ、彼女はくるぶしほどの浅瀬をおっかなびっくり歩きまわったあと引き返した。おまえは手招きをしたが、彼女がついてこられるような手助けをほとんどしなかった。おまえは憑かれていたからだ。おまえたちのかつての愛は、しばらくはおまえたちをつなぎとめた。だが、彼女にはおまえの冒険について行くための資質がなかった。彼女はおまえが発狂していくのではないかと感じた。とうとう——そうだな、彼女はその大海のなかにおまえを見失ったわけだ。正しくはないかね。そうではなかったのか？」。

これほど異なった存在が、ぼくのことをここまで知っているのかと考えて啞然となった。そのとおりだと眩くしかなかったのだ。

「わたしの場合は」と〈ほのお〉はいった。「災難そのものがちがっていた。地球時間における幾百万年、わたしは太陽という輝く世界のなかで愛する連れ合いと暮らしたのかわからない。おまえたち二人と同様、わたしたちもふしぎなくらい異なっていた。連れ合いは芸術、そして千もの友好の才能、わたしは心霊科学への献身。長い長い同棲を経たあと、愛はおまえたちには想像もできないほどの調和に達した。テレパシー接触があるから、なおのことだ。わたしたちは文字どおり、あらゆる思想、つまりは束の間の、十分に見いだしてはいない、あらゆるイメージを共有した。とはいっても、わたしたちはひとつの統合された「わたし」ではなく、見事なまでに調和のとれた「わたしたち」であったのだ。

あらゆる経験、あらゆる思想、あらゆる感情と欲望を共有しながら、そのいくつかは「わたしのもの」であり、またそのいくつかは「あなたのもの」だった。わたしの連れ合いは火炎舞踊や集団舞踊術にかかわる輝かしい着想を得たとき、最高の自己表現を遂げてみせた。その一方で、下方あるいは上方の極限世界で傷ついた者たちを癒すという、おおよけの仕事にもついていた。連れ合いを介して、生来孤独な質であったわたしも、多くの友を得た。連れ合いの芸術を共有し、そして申し分のない洞察を得た。連れ合いの慈善と果敢な救援活動は、わたし自身の行為であるかのようにわたしを陶冶した。そしてわたしの方は、せめてはわたしにとってのすべて、つまりはわたしの心霊科学を連れ合いにささげたのだ」。

〈ほのお〉がすいぶん長く押し黙っていたので、とうとうぼくはこういった。「それなのに破局が訪れたのですか」。「惑星の形成期に」と〈ほのお〉はいった。「彼（『彼女』）といいなおせば、その災難を実感してもらえないかな）は太陽に残された。わたしたちはしばらくはテレパシーで連絡し合っていた。知ってのとおり、距離は超感覚的な認識にとってはなんら障害とはならない。少しのあいだ、つまりは実際は数千年ほど、わたしは二重の生活を送っていた。ひとつはどろどろの惑星での心淋しい生活、もうひとつは懐かしの太陽環境での最愛の連れ合いを介しての生活。ところが、すでに知ってのとおり、地球へと追放された存在たちと太陽に残された同胞たちとのあいだの交信はますます難しくなり、ついには不可能になったのだ。少しずつ、わたしたちの絡み合った手蔓は引きちぎられていった。徐々にわたしたちは、苦しみながらも順応し自己充足していった。そしていまは、思い出だけがわたしたちをつないでいるのだ」。

〈ほのお〉は黙った。そこでぼくはこういった。「あなたにとっての喪失は運命でしたが、わたしの場合は妄念に取り憑かれて鈍感になっていたからです」。

「おまえは憑かれていた」と〈ほのお〉がいった。「しかも、自分の靈感に付き従うばかりで、ほかになにもしなかった。おまえがもっと覚醒し、みずからに憑かれていたなら、おそらく愛のしくじりなしに、みずからの星の巡りに従ったことだろう。しかし儚い自己中心的な存在に、これ以上なを期待できるといふのか。そのような存在を超えた力に憑かれたままで」。

「そのような存在を超えた力とは？」とぼくはいった。「一途な探求の情熱のほか、ぼくはいかなる力に憑かれていたのですか」。

〈ほのお〉はその問いにはこたえずに、自分の思考の流れのままに話を続けた。「おまえもわたしも喪失感を味わいしたが、怨みを残すことはなかった。おそらくそのおかげで、愛とはなにか、どのような共棲体が可能かを悟るようになったのだ。おそらくそのおかげでわたしたちは、人生を賭けた重要な仕事、すなわち、二つの種族のちがいを克服し、共棲体を確立するという仕事の準備がととのったのだ」。「そのとおりです」とぼくはいった。「ちがいがあればあるほど共有された生は豊かになります。たとえ一方が人間であり、もう一方がほのおであろうとも」。

ぼくは〈ほのお〉が共感を寄せてくるのを感じた。それから〈ほのお〉が話を続けた。「わたしの人類を実感してもらうために、まだやらなくてはならないことがある。おまえたちと同様わたしたちも、物理的に生存するためには物理的な過程に依存する。わたしたちが学んだおまえたちの科学によると、おまえたちの生命は化学変化に左右されるが、わたしたちの生理過程は、どちらかというと根本的には恒星の光球表面に生じる放射能の変化のようなものだ。すでに話したように、太陽にいたときのわたしたちは、物理的エネルギーが、絶え間なく、たいていは荒々しく、気体状の身体に衝突し、さらにはわたしたちを貫いたりするような環境のもとで暮らしていた。大きな危険は、噴流エネルギーの猛烈な衝撃によって崩壊することだった。その当時の摂食行動は無意識によるものだった。呼吸がおまえたちにとって

無意識であるのと同じことだ。しかし地球の冷たい火のなかにあるときは、知つてのとおり、わたしたちは飢えたように白熱の石炭の上を動きまわり、石炭原子のながしかを必死になつて崩壊させ、崩壊により生じる放射エネルギーをむさばり食う。わたしたちの生理過程についてこれ以上のことを語りうるとは思わないでほしい。できないからな。わたしたちがみずからの本性について科学的に認識していることは、どれもこれも、おまえたちの科学から、つまりはおまえたちの科学者の精神を介して集めることのできた諸原理を、わたしたちの生物体についてのみずからの経験に適用することによつて得たものだ。おまえたちのように手を操る能力に恵まれていたなら、おそらくわたしたちも実験科学を発達させたはずだ。だが、それは無理だつたと思う。気体状の太陽世界には掴めるような固い物が存在しなかつたので、実験を段取りしようにも手だてがなかつたからだ。地球では否応もなく固体に出くわす羽目になつたが、そうした致死的なまでの冷たさは避けてきた。だから、わたしたちは固体を扱うための器官を発達させてはいないのだ」。

「わたしたちに関しては、もうひとつ話さなくてはならないことがある。わたしたちは潜在的には不死であるから、生殖は減多にない。いや、というより二種類の生殖がある。通常でない方の生殖は自由意思によるものだ。個体としてのへほのおが頭から爪先までの全身を三分割すると、それぞれが完全な個体となる。このような生殖はもうひとつの生殖とは区別しなくてはならない。それについては先に述べた。凍てついて入眠したり、突然死を迎えたり、さらには固形状の粉塵になつたりすると、そのような粉塵の特定の粒子群が残りの粒子群から選りわけられ、風に運ばれて火炎状のなにかに取り付き、新たな個体へと発現する可能性がある。これはもうひとつの生殖に比べるとかなりゆっくりした過程であるが、一体の親から数百の子を産むことができる。気体状態からの分裂は三つが限度であるが、これら三つの新しい個体は一気に物理的に成熟した大人となる。しかも親の過去の経験にかなり関与する。親の過去の生活の多くを覚えてゐるのだ。しかも年長者との超感覚的接触を介した教育は著しく速い。他方、粉塵から生まれたほのおはゆっ

くりと、ようやくのことで成長し、親の経験についてはなにも覚えていない。物理的にほぼ成人となるまでは、彼らの超感覺的能力はじつに微々たるものなのだ」。

ここでぼくは、生殖に際しては性交がなんらかの役割を果たすのかと尋ねてみた。「それはない」と〈ほのお〉はいった。「じつをいうと、わたしたちは性的な生き物ではない。少なくとも通常の意味においてはそうではない。生殖のために一体となる、男と女の二つに分かれてはいない。おまえたちの性行動にも、生殖とは別の側面があるだろう。つまり人格的な愛のことだ。性的な愛が最高潮に達すると、おまえたちの場合、それは二つの異なった人格が神靈的に一体化するための手段となる。そしてわたしたちは二つの性にわかれてはいないが、ひとりひとりが、おまえたちが男と女と呼んでいる二つの原理の異体となるのだ。その結果、一方がもっている特定の男性具現体は、もう一方の女性具現体に引き寄せられる。その逆もそうだ。すでに述べたように、わたしたちにも、すでに述べたように、生殖とは直接に結びつかないが、鮮烈なまでに互いを欲ばせ豊かにする甘やかな肉体の接触と混交の形式が数々ある。このところの損失を補うために人口を増やす必要があるときは、種族的精神によって子を産むよう激励された個人は、増殖の前に愛しい相手との肉体的結合を求めることが多い。そのときには比較的元氣な子どもが生まれると考えられている。確かに、そんな子どもたちは、当の親が受け取った愛撫を与えたもう一方の親の特徴をいくらか発達させるのだ」。

火はすでに弱まりつつあった。ぼくはこういった。「一晩中でもお話を聞き取ることができるのですが、石炭がもうありません。わたしにどのようなお手伝いができるのか、教えた方がいいのではありませんか？」。

〈ほのお〉はこうこたえた。「それは賢明ではないな、わたしたちが単におまえたちと平等であるというだけでなく、おまえたちより優位にあることを、それとなく知ってもらうまでは。おまえたち人類の名譽を傷つけることなく、そのことを知ってもらうのはむずかしい。しかし信じてほしい。わたしたちがおまえたちより優れていると主張しているの

ではない。わたしたちに優れた点があるとすれば、わたしたち自身を超えたなものか、すなわち、神靈をより十全に明らかにしている点なのだ。そもそも、わたしたちのすべてが、さまざまな効率をもつ道具にすぎない。もろもろの条件により、いまのわたしたちはあるがままに存在するのだ。おまえの人類にしても、わたしの種族以上に十分な實際的技術と知的能力を発達させたのであるし、またわたしの種族はどちらかという和高次元の神靈的感性にめぐまれたのだ。これを自慢しようというのではない。わたしたちは、個体群としての、あるいは種族としてのわたしたちを称えるのではない。わたしたちのみならずおまえたちにしても、道具であり器であるような神靈を称えるのだ。わたしたちはこう認識している。おまえたちは数々の悲劇的な苦難を嘗めながらも、わたしたちが容易に成功裡に辿ってきた道に足を踏み入れた。いまはためらいがちに一步前進しては後退するしかないように思われるが（實際わたしたちの救済がなかったらおまえたちは自滅してもおかしくない）、それでも成功を収め、おそらく艱難辛苦の果てに、わたしたちだけではとうてい達成できない、さらに輝かしき神靈の顕現を護持していくかもしれないのだ。それまでは、わたしたちはおまえたちよりはるかに進んでいる。おそらくわたしたちは、おまえたちの絶望的な神靈上の問題のいくつかを解決する手助けすることにより、おまえたちに要求する實際的な援助に報いることができるだろう」。

〈ほのお〉は確かに「要求する」ということばを用いた。強制を意味しているとも意味していないともとれる。強制は〈ほのお〉の気質とは無縁であると、みずからにいい聞かせはしたが、少し恐怖し動揺したことは確かだ。しかしながら、ほくはそれを聞かなかったことにした。おそらくこの生き物は、ことばの曖昧さがわかるほど英語に通じてはいないのだろう。ほくがこんなふうを考えていることを〈ほのお〉は気づいているのだろうか、気がかりには思った。その間に〈ほのお〉は、ふたたび話しはじめていた。「おまえは地球人類のなかの数少ないひとりだ」と〈ほのお〉はいった。「芸術に深く心動かされるといふ点ではな。おまえをわたしたちの美的体験そのものへと導くことはできな

いかかもしれない。おまえにとつては、あまりにも異質だからだ。しかし、おまえにもわかるような、この上なく優美で比類なく深遠な美的経験を与えることによって、わたしたちの芸術の力を少しばかり披露してみよう。厳密にはおまえ独りでできるような経験ではないが、おまえの感受性を通常域以上に増大させることは可能だ。助けがないままの人間の領域を少しばかり超えた高処へとおまえを導いてやるとしよう。わたしが披露するのは、ある意味、わたしたちの偉大な芸術家のひとりによる作品の翻訳、それもじつに粗雑な翻訳でしかない。原作のまま観賞すると、それ相応のものとして、かなり満足のいく作品なのではあるが、それ相応とはいっても比較的単純なほうだ。だからそれを選んだのだ。その意義深さは、わたしの種族とおまえの人類に共通する美的経験の圏内にほぼ完全に収まるものだ。そうはいっても、原作の美的な形象はわたしたちのものであり、おまえたちのものではないのだし、おまえたちにとって意味のある連想を抱いてもらうためには、おまえたちの形象へと置換しなくてはならないのだから、原作の美的形象のほとんどは犠牲にするしかない。できるかぎり詳しく、おまえにとって意味のある、そしておまえの身の丈に合った形象やリズムを採用することになるだろう。いってみれば、わたしたちの偉大な「詩」を、内容は変えないまでも、凡庸な「散文」へと翻訳しただけのものを、おまえにもたらしことになるだろう。わたしの翻訳は原作に比べると、色褪せ、流麗さを欠いたものにならざるをえない。それでも、おまえにとって真に美的な価値をもつもの、そしてどれほどことばを尽くしても得られないような、わたしの種族の神霊についてのより多くの洞察をもたらすであろうものをおまえに与えることができるかと考えている」。ぼくはこういった。「不可能なことのよう聞こえますが、精一杯傾注するとしましょう」。

さて、トーよ、〈ほのお〉はじつにすばらしい経験をぼくに与え続けた。当然それはことばで伝えられるものではないが、それでもぼくの前に立ち現れたものを、それらしく描くぐらいはできるだろう。きみは古典への厳格な趣味をもっているから、ぼくがすっかり情緒主義におちいったのではと怪しむのではないか心配だ。それでも、いうべきことはい

わなくてはね。ぼくは気がついたのだ。視覚と聴覚の形象群が、ぼく自身の心のなかを、ほかすべての人間的感覚から生じる形象群を茫漠とした背景にして、次から次へとリズムミカルによぎっていることに。これらの形象のどれかひとつが、とりわけ触覚と嗅覚の形象が舞台の中央を占めたりもした。肉体の苦痛と性の歓喜から成る華々しい閃きもあった。これらの形象が意味のない絵柄へと織り合わされていただけだといいたいのではない。そうではない！ これらの形象は、そうだね、あらゆる種類の、人格的かつ社会的な、さらに宗教的な畏れと大望を表現するための道具となったのだ。あたかも慣れ親しんだ感覚のすべてで構成されたふしぎな編成曲に耳を傾けたかのようなようだった。へほのお、自身の精神と接触しなかったら知りえないような異風な経験が、そこかしこに響き渡っていた。その音楽の趣旨をリズムミカルな声にした意味ありげな人間のことばに気づくこともあった。そして曲全体が、反復はありながら絶えず変化するリズムへと編み込まれた。ぼくに人間的な感動をもたらし、じつに悲劇的で、じつに意気揚揚とし、じつに悲哀と笑いに満ちた、このような形象の氾濫し切った挙句が、ぼくにとっては、宇宙が個人的神靈にもたらず（これまで感じたことがない）衝撃を感じ取るための目覚めとなったのだ。

トーよ、ぼくが不毛な贅言に溺れていることは知っているよ。でも、ほんとうに圧倒的な美的体験を味わったことは信じてほしい。絵画、音楽、詩、演劇、そしてさらに慎ましやかな技芸を一緒にしたような、ひとつの美的形象を思い描くといい。パッハやシェイクスピア、そしてきみにとって大切な画家のだれでもいいが、これらの芸術家によって開示された高処というか、そのすべてが代わる代わる、あるいはひと括りにして天秤に掛けられるような高処を思い浮かべるといい。このすべてがひとつの厳格な美の絵柄のなかで成就されている様を思い描いてみるといい。もちろん、そのようなものを想像することはできないだろう（ぼくもできなかった）。しかも、古典的な規範の厳格さと簡素さに耽溺しているきみからすると、ぼくの情緒的なロマン主義にはぞっとするだろうね。しかし、かつてぼくが味わった

かなる経験にもまして、より深く、そして思うに、より知的に覚醒していたのだと信じてくれたまえ。

さて、すべてが終わったとき、ぼくはしばらく放心していたにちがいない。「あきらかに、あえて期待した以上にうまくいった」と〈ほのお〉がいつているのはと気がついたからだ。〈ほのお〉が優しそうに笑いかけていることも気がついた。「忘れないでほしいのだが」と〈ほのお〉はいった。「おまえはひとつの芸術作品を味わったにすぎない。なにがしかの神秘的啓示を得たなどと思ひ込まないように願いたい。あらゆる芸術が、新しい価値への目覚めの感情をもたらす点では神秘的な側面をもつといわれているが、それ以上のものではないのだから。おまえには原作のぼんやりと歪んだ像しか見せてはいないが、もしそれによって、わたしたち二つの人類の本質的な血族関係を悟ったのであれば、それで本来の目的を果たしたことになる」。

ぼくはどもりながら返答した。「見せていただきました、確かに！ しかしこんなものではないのですね。見せていただきましたよ、神を。美と真実と善の神を。これからはわたしは神を信じます」。

〈ほのお〉はかなり語気鋭く返答してきた。「くだらない！ おまえは『神』など見ていない。わたしは『神』を見せようとしたのではないのだ。高揚し悟りゆくような経験をしたために、おまえは宇宙の核心に開悟したにちがいないと信じ込んでいる。わたしたちのだけれも、『神』について、いやそのような名にあたいする存在があるのかどうか、まったくわからないのだ。わたしたち二つの人類の観念は、いずれも出来が悪すぎて、神が存在するとも存在しないともつかないような奥処あるいは高処へと観入してはいない。わたしはせいぜい、美と真実と善そのものについての、より澄み冴えた経験をおまえに与えただけなのだ。はるかなる神秘という感覚をもたらしたのだが、それはおまえ自身の人類の何人かが〈まばゆき闇〉とか〈燃え盛る冷気〉とか〈雄弁なる沈黙〉と称してきたものなのだ」。

いさめられて、ぼくはこういった。「あきらかにそのとおりです。でも、教えてください。あなたの同胞を救出する

ためになにができるかを教えていただく準備が、わたしにはまだ十分ととのってはいないのですか。「まだだ」とへほのおはいった。「明日の晩でも早いくらいだ。わたしたちについて認識したことのすべてを一日かけて考えるがいい。性急に、あるいは強い感情に影響されたまま、ものごとを決めてはならない。人間はなにことも距離をおいて考えるべきであり、しかるべき熟慮のうちに、自由に、そして心の底から火災人類に協力したいと思う必要があるのだ。ではおやすみ！ 山歩きを楽しむがいい」。

炉火はいまや急速に消えつつあった。ほくのふしぎな友は、安心して入眠できる適当な穴を求めて炉床の奥の耐火煉瓦を探りはじめた。気温が下がっていくことにはぶつくさいいながら、へほのおはついに望みの場所を見つけ、最後におやすみをいうと、その煉瓦のなかへと沈潜していった。

あたたかな居間から出ると、寝室は北極のようだった。ほくは急いで床に就いた。驚くべき経験により激しい頭痛を感じていたので、その夜は眠れないだろうと思った。ところが、あつという間に寝入ってしまった、そして熟睡したにちがいがなかった。ほどなく目を覚ますと、農家の庭先の朝の喧騒が聞こえてきたからだ。

朝食後、ほくは昨夜の対話を注意深く書きとめたのだが、驚いたことに、なにもかもじつにありありと覚えていた。あきらかに炎人たちが、ほくの記憶をずっと助けてくれていたのだった。

(後半に続く)

(はまぐち・みのる 理工学部教授)